娘子隊の鶴ケ城籠城戦

中野優子らは、一八六八年八月二十五日の晩から二十七日まで、会津坂下に居て、二十八日、みなとともに入城しました。

菊子は、家老萱野より付けられた二名の侍に護送されます。大町通りから割場、西出丸西追手門から合言葉にて開門、入城。その時の姿は、断髪を無造作に束ね、血汐に染んだ破れた着物に、血の付いた薙刀（なぎなた）を抱えていました。この時、山本八重子さんは鉄砲を貸してくれました。

入城すると殿様に万願寺鯉七尾を献上。鉄（くろがね）門で、殿様に拝謁を賜り、大そうお褒めに預かり御手から柿の実をくだされ、五寸ほどの御菓子を賜わります。照姫様に拝謁仰せつけられ、有難い言葉を賜わります。菊子は、入城中、西出丸で八重子さんより借りた鉄砲にて敵を狙撃。その他、弾薬の運搬をしていました。菊子と優子は、男装をして年齢も若かったので、白虎隊とよく間違われました。

ある日、口火の付いた大きな砲弾が、小田山より来て、多数負傷者の大広間の縁の下に入りました。こう子は、直ぐに手桶を提げ追いかけ、ザブンと水を注いで口火を消したので多数の負傷者が助かったのです。この時から、焼け弾の破裂を防ぐのは婦人や子供の仕事となりました。九月十四日の総攻撃後、こう子は、手を洗う暇もなく、常に血だらけの手にてお握りや田螺などを食べつつ働いていました。『会津戊辰戦争』より

娘子（じょうし）隊（軍）

戦いは一八六八年八月二十五日、夜九時～十二時

『会津戊辰戦争』水島菊子の談

藩士依田駒之新の婿、源治は伏見で戦死。妹の菊子は、義兄の敵として仇打ちの機会を伺う。門奈治部の婦人梅子より薙刀を習っていたが六～七人。時を同じく、赤岡大介の門下生中野竹子・優子がいました。二十余人が「婦人決死隊」を結成。指揮者は無く、婦人の一団にすぎなかった。自らは「娘子軍」と呼ぶ。『会津戊辰戦史』女子が戦いに参加するのは許さず、正式な隊でなく「女隊」と呼びました。

菊子は、母を農家に避難させ、髪を斬り、しかと束ね、白鉢巻、白襷を掛け、稽古で用いる義経袴に一刀を横にし、薙刀を掻い込み、姉とともに太刀四・五振りを抱え家を出た。西出丸の城門は閉ざされ、入れなかったので、西へ走りました。十八蔵は燃え上がり、侍屋敷も火災。無腰の人に太刀を与え、米代一之丁を通り川原町口で、田母神家を出た中野親子三人、岡村すま子と合流六人。着物が雨に濡れ重く、疲れていたところに、城中より来た侍が「照姫様は坂下驛へ御立ち退きになった」と、一同坂下へ向う。しかし照姫はなく、法界寺に入るとご飯と万願寺鯉もいます。夜、こう子と竹子は、優子を不敏に思い殺そうとするが止められます。

八月二十五日、神指（こうざし）での戦い

今日こそ、うっ憤を晴そうと、勇んで身支度をし、中野こう（幸）子（四十四歳）、竹子（二十二歳）、優子（十六歳）、依田まき子（三十五歳）、依田菊子は（十八歳）、岡村すま子（三十歳）はそれぞれ色の違う義経袴と着物、白木綿の鉢巻、二重の襷（たすき）、大小の刀に白足袋に草鞋（わらじ）、薙刀を掻い込み寺を出ました。近所の老婦女子も大勢来て涙を流したのです。坂下陣屋で旧幕府古屋作左衛門の衝鋒隊約四百人と渋谷東馬ら四十人と合流。

敵に攻撃を始めたのは、九時頃。家老萱野隊が米沢街道方面より砲撃を始め、味方も打ち合う。夕方、再度攻撃をした。長州・大垣の敵は、川の両方に陣地を築いて守備していました。

夜九時頃、約二五〇人の最後にいて、真っ暗な中接戦となり、敵の隊長らしき者が、女と見て「討たずに生捕れ」と声を上げると、敵兵どもにわかに私どもめがけて群がり、幾重にも囲んだ。「生捕られるなら　恥辱を受くるな」と大声でお互い呼ばり、必死に斬りまくりました。

優子は、母の近くにいて、母が「ヤラレタ」と怒り心頭、獅子奮迅の勢いで、眉間に銃弾を受けた竹子に近づく。優子はようやく首を介錯。坂下に帰る途中、農兵が首を持ってくれました。この間、戦闘は二、三十分位。場所は乾田で、柳橋北六丁（六五四メートル）離れた湯川寄り。

なお、神保雪子は、独自の行動をし『七年史』では、現在の西七日町で戦死という。

竹子姉妹奮戦図、法界寺蔵

竹子墓、法界寺

図・写真・文　石田明夫　問合せ　電話・Fax 0242-24-3423まで
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索